

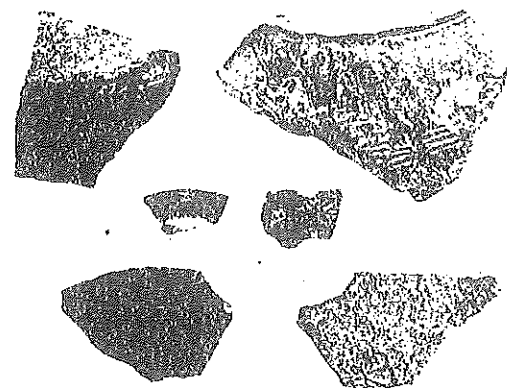
# 郷土資料館だより

平成6年1月10日 発行 NO. 8

今回の郷土資料館だよりNO. 8は、中世、いわゆる鎌倉・室町時代に作られた陶磁器と五輪塔等の石造物についてです。逗子市内の中世の遺跡としては、神武寺、名越切通、住吉城址や市内各地に点在するやぐら群などがあります。各遺跡からは、分布調査により遺物が採集されています。今回は、これらの遺跡から採集された物について説明いたします。

一般に中世の遺跡からは、かわらけや陶磁器などの遺物が出土します。かわらけは、素焼きの皿のことです。陶磁器は、釉薬をかけた陶器と磁器を総称していいます。陶器は粘土をこねて釉薬をかけて焼いた焼き物をいいます。磁器は、白磁鉢という磁石を細かくつぶして成形し、釉薬をかけて焼いた焼き物をいいます。陶器は日本国内では、古墳時代以降に灰釉陶器・緑釉陶器などが焼かれましたが、平安時代後期になって愛知県知多半島の常滑において壺が焼かれ始め、鎌倉時代になると愛知県で瀬戸焼が焼かれ、それ以降多種多様の陶器が焼かれていきました。磁器は、中世においては国内では生産されず、もっぱら中国・朝鮮からの輸入品として舶載陶磁器が出回っています。

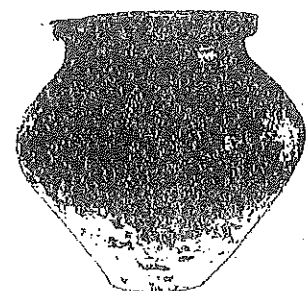
逗子市内では、中世の遺跡としては小坪から久木にかけて位置する鎌倉時代に造られ主として三浦方面から鎌倉への通路で、通称「七切通し」の1つの名越切通、小坪にありの北条早雲が三浦道寸と弟道香を攻めて敗退させた住吉城址、神武寺の城郭遺構、鎌倉時代から室町時代にかけて造られた鎌倉市周辺で確認されている中世の横穴式の墓で、市内各地に点在するやぐら群などがあります。これらの遺跡からは、数々の陶磁器やかわらけが出土したり採集されています。展示品としては、国内産の陶磁器片では平安時代にさかのぼりますが、桜山の持田遺跡か



1. 神武寺寺域出土陶器



2. 名越切通出土陶器



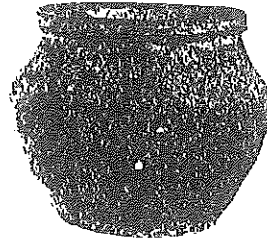
3. 常滑蔵骨器

ら灰釉陶器片や緑釉陶器片が出土しています。

中世では、神武寺寺域や名越切通から写真1と2のような灰釉陶器片常滑壺片・天目茶碗の破片が出土しています。完形の遺物としては、写真3のまんだら堂やぐらから出土した鎌倉時代に火葬骨を埋葬するための容器として使われた常滑焼きの蔵骨器、写真4の小坪大塚より出土した古備前の片口壺、写真5の丹沢慶作氏により寄贈された常滑焼きの壺などがあります。その他、写真6と7の沼間の先祖やぐらから出土した鎌倉時代のかわらけ、住吉城址より出土した室町時代のかわらけなどがあります。舶載の磁器片では神武寺寺域や名越切通から鎌倉時代から室町時代にかけての青磁片が出土しています。やぐら群からは焼き物の他に五輪塔が出土します。五輪塔は、空・風・火・水・地の五大の元素を現した5つの石を積み上げ仏教思想に基づいて平安時代に創始されたものです。五輪塔は宝篋印塔とともに、全国的に分布しており、多くが武士層によって造立されました。元来五輪塔は堂の落成、仏像開眼時の供養を目的としましたが、鎌倉時代以後は先亡者の供養や墓石としてつくられるようになりました。製作は、空風輪を1石、他を3石に分けるものが一般的で、各輪に1字ずつ梵字が刻まれる場合が多く、地輪には、造立年代・趣旨・施主名が刻まれることがあります。資料館では写真7の五輪塔をはじめ海前寺西やぐら群より出土した3基の五輪塔を展示しています。



4. 古備前片口壺



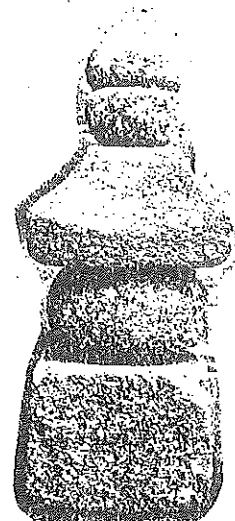
5. 常滑壺



6. かわらけ



7. かわらけ



8. 五輪塔

( 文化財専門員 宮坂淳一 )

| 梵字 | 五大 | 形式 | 読み | 字義 | 五輪 |
|----|----|----|----|----|----|
| 宝珠 | 空輪 | 円  | キヤ | 虚空 | 上  |
| 受化 | 風輪 | 半月 | カ  | 因草 | 下  |
| 塔石 | 火輪 | 三角 | ラ  | 摩竭 | 中  |
| 塔身 | 水輪 | 円  | バ  | 言説 | 下  |
|    | 地輪 | 方  | ア  | 不生 | 底  |

五輪塔各部名称と意味

1993年(平成5年)1月10日 発行

逗子市郷土資料館だより NO. 8

編集発行者 逗子市郷土資料館

逗子市磯山8丁目2275番

電話 0468-73-1741

© 逗子市教育委員会 1993